



幼なかつた父と母は空襲の中を

今年の8月15日は、69回目の終戦の日でした。もう来年は戦後70年も経つのだなあ…と改めて感じる一方、今でも海外では地域紛争や軍事介入が行われているという現実にも複雑な気持ちにならざるを得ません。そして今年は自然と家族間でそういった話をする機会が増え、両親から興味深い体験談を聞くことができました。

私の父は1930年生まれですので、いわゆる「戦中派」より少しだけ後の世代。兵隊に行くことはなかったものの、物心ついてから終戦を迎える14歳まで欽定憲法の下、軍事教育を受けていました。

しかし、第二次世界大戦中連日勇ましい戦果を耳にするのとはうらはらに、終戦が近づくにつれ空襲警報が鳴り響くことが増えて行ったそうです。そして1945年7月、暮らしていた神奈川県平塚市を大空襲が襲います。

その夜空襲警報で飛び起きた父は、弟4人を連れて近くの海岸に逃げて行きました。ところが米軍の爆撃機が2機連なって、海岸から市街地まで絨毯爆撃を始めたのです。父たちは慌てて爆撃が進む西(大磯町)から東(茅ヶ崎市)方面に逃げましたが、いずれ追いつかれ逃げ場がなくなることは明白。そこで、逆をついて爆撃が終わった方向へ逃げることにして、火柱の中大磯方面に駆け抜け、何とか九死に一生を得ることができたのです。

両親(私の祖父母)とも無事に再会できた上に、自宅も焼けることなく無事だったのも、まさに奇跡的な出来事だったと言います。

それから約1か月経ち、玉音放送を聞いた父は日本が戦争に負けたことが信じられなかったのですが、その2~3日後海岸に大勢の人々が集まっているのを見て行ってみると、相模湾を米軍の艦隊がずらーっと囲むように停泊しているのに驚き、それまでの大本営発表が虚偽まみれであったことや現実がはっきり解った

そうです。

一方、母は1940年生まれですので、戦争末期はまだ物心つくかつかないかといった幼児でした。当時母の家族は浅草に住んでいましたが、空襲の際母親(私の祖母)におぶわれて逃げる中、近くの防空壕が人でいっぱいに入れなかったことがありました。

入り口には憲兵のような格好のいかつい男性がいて、追い払うようにされた母たちは、幸い違う場所の防空壕に入ることができたものの、だいぶ後になって入れなかった方の壕には焼夷弾が直撃して全員が亡くなっていたことを知り、運命の恐ろしさに背中が凍りついたそうです。

そんな両親たちは、母の家族が平塚に移転して来たことがきっかけでやがて出会い、結婚して私や兄弟が生まれました。父は、今でも「もし空襲で死んでいたら」ということや「自分はたまたま年齢的に徴兵されずに済んだが、ほんの2~3歳上だったばかりに出征し戦死していった人たちが大勢いることへの、贖罪のような気持ち」が、ずーっと心の隅から離れないと言います。

私自身は、古い言葉で言えば「戦争を知らない世代」。死と隣り合わせの戦時下の恐ろしさは解りませんし、もし両親が亡くなっていたら私もこの世にいないのだ…という、感謝のような気持ちの方が大きいのですが、多くの不幸を生む戦争は二度と起こしてはならないということだけは、語り継いで行かねばならないと強く感じています。



私の父が2004年にラバウルの「ココボ博物館」で撮影した旧日本軍の戦闘機残骸です